



修学旅行 5 孤高の視線と天ぷら定食



ホテルに入り、しばらくして夕食となった。このホテルはどうも中華料理がうりらしく、エビチリや麻婆豆腐などのメニューが並んでいた。そういえばホテルの玄関を入るときに、ふと二階を見上げると壁に“〇〇中華料理 〇〇絶品”みたいな看板が取り付けられていたような気がする。

和やかに話をしながら、夕食は進んだ。

隣にいたS太くんに何気なく話しかけた。

「今晚、これから何するの？」

すると、S太くんの態度はそれまでの和気あいあいとした雰囲気から明らかに変わり、毅然とした態度でこう答えた。

「今日の夜は、絶対に僕たちの部屋に来ないでください。」

「何かするの？」

「秘密です。」

「何か特別なこと？」

「秘密です。秘密なんです。」

その言葉は冷静さを保ちながらも、孤高の戦士が覚悟を決めて決戦に望むような確固たる意志がみなぎり、それ以上に言葉を差し挟むことをゆるさないとでも言うように、視線は“きっ”と一直線に窓の外を見つめるのであった。その先に“天ぷら定食 1,000円”の看板があったのは、きっと偶然であろう。

しかし、何か起きそうな予感めいたものが脳裏をかすめた。

その夜。それは起きた。たしか9時頃であったろうかホテルの自室でくつろいでいると、突然、隣の男子部屋から女性のものと思われる甲高い声が上がった。

「きゃ〜っ。」

しばし間を置いて、隣部屋と仕切る壁がガタガタと鳴った。

それが幾度か繰り返され、急に静かになった。それきり何も聞こえなかった。



その後、なぜかしら頭の中に流れる“○曜サスペンス劇場”のテーマ曲とともにいつの間にか眠ってしまい、気がつくとカーテンの隙間から朝日が射しこんでいた。

それは鹿が悪い！？

朝食は7時から、昨夜夕食をとったのと同じ食堂で始まった。

「いや～、口内炎ができて痛いんです。」と、ゆっくり朝食を食べるH太くんに、「えっ、実はぼくもできてるんだよな～」と、S太くんが応じた、

ふたりの会話を聞きながら昨夜の出来事がどうしても頭から離れず、いつになく注意深く子ども達一人一人の様子を観察した。

しかし、これと言って変わったことは無い。強いて言えば妙なさりげなさが鼻をつ

き、皆で何かを取り繕い漆黒のベールで覆い隠そうとしているかのような違和感を覚えたのは、猜疑心の高じた眼で見ているせいかもしれなかった。

「昨日の夜、みんな何してたの？」

意を決して、しかしできるだけ内心の緊張が伝わらないように尋ねてみた。

すると、即座にあっさりと返事がかえってきた。

「トランプですよ。」

「トランプ？ でも、ドタバタ音がして、“きゃーっ”という叫び声も聞こえたんだけど」

「盛り上がって、みんな大きな声で叫んでたかも・・・・」

ふむふむ、話をまとめてみると、どうやら昨夜の自由時間に男女全員が男子部屋に集まってトランプをしていたらしい。それが大いに盛り上がり、時に歓声を上げながら、時にボディアクションで気持ちを表現しながらちょっとばかりはめをはずし、“きゃーっ”“ドタバタ”となってしまったようだ。

そんな話をもうそこで終わらせるように、K音さんがつぶやいた。

「鹿ですよ。」「奈良の鹿が騒いでいたんです。」

その場にいた全員が、心の中で「なるほど、そうであったか。」と、うなずいた気がした。

でもね、K音さんに一言。 ———— ここは京都です。